

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 1 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520910

研究課題名(和文) 中世フランス都市家屋の構造・建築様式・分布に関する歴史考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeo-historical study on the structure, architectural style and distribution of the French medieval urban houses

研究代表者

堀越 宏一 (HORIKOSHI, KOICHI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20255194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：クリュニーに残されている石造の中世町家は、1階にゴシック式尖頭アーチからなる開口部、2階にロマネスク式の2連窓を備えた、特徴的な家々である。このような様式の町家は、個人の店舗兼住宅であり、おそらくクリュニー修道院の主導下に、クリュニー以南のサンティアゴ巡礼路沿いの都市にも数多く建てられた。

他方、1階にゴシック式尖頭アーチ列をもつ大型公共建築物は、同巡礼路以外の都市でもヨーロッパ各地に存在する。クリュニー型個人住宅と合わせて、これらの世俗建築物は、ロマネスク式とゴシック式の教会建築の影響下に建てられたものであり、そこに、古代ローマ建築と中世ヨーロッパ建築との接点を見出すことが出来る。

研究成果の概要(英文)：Urban masonry houses of the Middle Ages built in the city of Cluny in Macon region are very distinctive with their pointed arch opening to ground pavement and double Romanesque windows on the first floor. So many shops as individual homes, this type of urban houses is constructed along the Way of Saint James, probably at the initiative of the Abbey of Cluny.

On the other hand, there are also large public buildings with the series of pointed arches in other European cities like Venice and Mantua in Italy and Ieper in Flanders. With individual houses of Cluniac type, they are built under the influence of ecclesiastical architecture, Romanesque or Gothic; there we can find a point of contact between the Roman architecture and that of the Middle Ages in secular buildings.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：中世ヨーロッパ 都市 住宅 店舗 クリュニー サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路

1. 研究開始当初の背景

フランスにおいては、教会や修道院などのキリスト教建築と城や都市囲壁などの軍事建築と比較すると、中世の世俗家屋に対する歴史学的・考古学的ないし建築史的関心は、さほど古くに遡るものではない。1970年代以降、カーン大学のミシェル・ド・ブール Michel de Bouard を中心として、学術的な中世考古学が形成されていくなかで、まず、ジャン=マリ・プゼ Jean-Marie Pesez (社会科学高等研究院) やガブリエル・デミアン・ダール シャンボール Gabrielle Démians d'Archimbaud (エクス・アン・プロヴァンス大学) のような先駆的研究者が中世農村 (それぞれ、ドラシイ Dracy とルージュエ Rougiers) の発掘により中世農家建築研究の分野で大きな成果を挙げた。

さらにその後、特にジャン=マリ・プゼは、イヴ・エスキュー Yves Esquieu (エクス・アン・プロヴァンス大学) に代表されるような中世都市建築研究にも関心を寄せるようになっていく。両者の共同作業は、Ed. Yves Esquieu et Jean-Marie Pesez, *Cent maisons médiévales en France (du XII^e au milieu du XVI^e siècle)*, Paris, 1998 という農村と都市双方の中世家屋を網羅した総合的著作に結実している。

中世都市家屋に関しては、その研究対象として、最も重要な都市は、11世紀末から14世紀にかけての町家が124軒も残存する中部フランスの修道院門前町クリュニー Cluny である。特に、ここには、ヴェネツィア Venezia とともに、ヨーロッパで最も多くのロマネスク期の住宅が残されているとされる。このクリュニーの町家に関しては、ピエール・ギャリグー・グランシャン Pierre Garrigou Grandchamp とジャン=ドニ・サルヴェク Jean-Denis Salvèque を中心とする建築史研究グループ (Centre d'Etudes Clunisiennes) が、1980年代初め以来、長年にわたり建築考古学的研究を積み重ねてきた。それによって、クリュニーの中世町家は、その都市内配置、正面壁面と内部構造に関する建築要素、そして各種装飾や室内設備にいたる詳細が多角的に解明されている。

その一方で、2002年からは、フランスでは考古学発掘が、開発に伴う緊急発掘を職業的に行う発掘組織にほぼ独占されるようになり、大学に所属する考古学者による学術的な発掘が行われる可能性はほとんどなくなってしまった。このような状況下で、大学の考古学者は、発掘によらない、地上に現存する中世の建物の建築考古学的分析 (l'archéologie du bâti) に関心を寄せる傾向にあり、城や宗教建築だけでなく、町家を含む都市に残された世俗建築物が主要な分析対象となっている。

このような動向とも関連して、近年のフランスでは、文化省の主導下に各種文化財や図像資料のデータ・ベース化が推進されるなか

で、歴史的建造物や物質資料についても、「メリメ Mérimée」や「パリッシイ Mobilier-Palissy」を代表とするデータ・ベースが設けられている。そこでは、中世に遡るフランス全域の都市家屋などの情報が図像を含めて網羅的に収集、公開され、自由に閲覧できるようになっている。

こうした研究が積み重ねられていった結果、フランス各地に現存する中世都市家屋について、建築学的情報が収集・分析され、都市民の住居であると同時に、店舗や手工業者の工房でもあった町家の多機能的構造に光が当てられるようになった。さらに、都市内の街区における町家の配置状況の検討を通じて、教会・城・市庁舎・市場広場などとともに、都市景観の構成要素としての町家とその装飾の役割も重視されるようになった。こうして、これまでは、文献史料と大型の公共的建築物によってのみ研究されてきた中世フランス都市の建築物の具体像が、より多角的に明らかになり、その結果、現在、中世都市に対する理解は格段に立体的奥行きを備えたものになりつつある。

このような中世フランス考古学の研究動向とその成果に関しては、日本で紹介されることはこれまでほとんどなかった。しかし、『西洋中世学入門』(高山博・池上俊一編、東京大学出版会、2005年)の「中世考古学」の章で、私自身が、農村と都市、城に関する中世考古学研究の動向をごく簡単に紹介する機会があったほか、2005年から3年間にわたり、科研費基盤研究(C)「中世フランスの住空間の構造と機能に関する歴史考古学的研究」を許されて、そこで多くの新たな情報と発見を得ることができた。そのなかで、城と農村家屋とともに、中世都市家屋に関しても概説的分析を行った。本研究は、それをさらに推し進めるものとして立案された。

2. 研究の目的

本研究では、フランス中部の都市クリュニーに加えて、クリュニー修道院が深く関与したサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路沿いのフランス南西部の諸都市に残存する中世都市家屋の調査と研究に重心を置いた。そこでは、私が、2008年度東洋大学特別研究「中世フランスにおける都市家屋の構造と機能」のなかで発見し、「中世クリュニーの町家の装飾窓 (claire-voie)」(『東洋大学文学部紀要・史学科篇』2010年)において推論した問題(以下の3))も含めて、中世町家を多角的に検討した。

具体的には、以下の4点の仮説の実証を目指した。

1) 第一に、これらの地方に多く残されている、正面2階の装飾窓 (claire-voie) と1階の尖頭アーチ型開口部という二つの特徴的な建築要素をもつ中世町家 (= 「クリュニー型中世町家」) を対象として、住居であると同時に、店舗や手工業の工房でもあった中

世都市独特の多機能的家屋の構造と機能を個別具体的に検証し、その歴史考古学的特徴と時代的な変遷を明らかにすることを考えた。

そこでは、後藤久『西洋住居史』(彰国社、2005年)が主張するように、これらの中世の商工業者の住宅兼店舗の町家の構造が、イタリアのオステア Ostia などに残る古代ローマ都市の多機能的共同住宅 insula の構造と非常に類似していると考えられていることから、両者の構造と機能の比較検討を通じて、古代ローマと中世ヨーロッパの都市建築における連続性の問題にひとつの答えを与えることを研究の目的とした。

2) 次いで、これらクリュニーの中世町家の正面構成の内容が、ロマネスク式教会建築の代表例であるクリュニー修道院教会(1180年代に建設が始まった、いわゆる Cluny III)の建築様式の強い影響下にあるという問題の考察を研究目的とした。

それにより、従来は別個に論じられてきた中世の宗教建築と世俗建築との間に存在した影響関係を解明することを目指したのである。

3) 加えて、そのようなクリュニー修道院の影響を受けて形成された「クリュニー型中世町家群」が、都市クリュニーだけでなく、ブルゴーニュ地方と同修道院の指導下に展開したサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路沿いのフランス中部と南西部諸都市に多く建設されたことが推測されることから、その実態とそれが残存する都市の分布を調査することにより、この仮説の実証を目指すことを研究目的とした。

この作業を通じて、教会建築の分野ではクリュニー修道院教会の影響がなかったとされてきたサンティアゴ巡礼路都市であっても、世俗の町家建築においては、クリュニー修道院の影響が大きかったことを実証できることが予想された。

4) 特に巡礼路都市の場合には、これらの装飾的な家屋の都市全体の中での配置を検討することにより、クリュニー型町家と都市景観の間に特徴的な関係があったことを解明することも想定した。

具体的には、クリュニーの場合には、修道院の外壁に沿うように直交する2本のメイン・ストリートを中心として、それに隣接する街路も含めて、それらに面して並ぶ町家の正面2階の装飾窓(claire-voie)が、教会西正面中段を飾る連続アーチ装飾を模したものであるという、ピエール・ギャリグー・グランシャンとジャン＝ドニ・サルヴェクの主張が、どこまで一般化できるかを考えることを研究目的とした。

3. 研究の方法

方法論としては、現存ないし発掘された中世都市建物に関する建築史および考古学的研究の総括をおこなうと同時に、その成果と

文献史料、図像データという三つの方向から、中世都市家屋の構造と機能を学際的に解明することを考えた。

1) まず、研究対象地域の中世都市家屋に関して、刊行されている論文、研究書、発掘報告書に記載されている情報収集を行うと同時に、前述のフランス文化省の歴史建造物関連のデータ・ベースを利用して、各都市の中世家屋の個別情報を網羅的に調査した。

2) そのうえで、現地調査を複数回実施し、現在、フランスで現存ないし発掘されている中世都市家屋の現場と博物館などに保存されている発掘資料の調査を行った。これは、単なる考古学情報の収集というだけでなく、刊行されている発掘報告書や研究書、データ・ベースに記載されている情報の完全な理解を得るために、必要不可欠な作業である。

3) 同時に、研究対象となる都市の中世家屋に関して、当該地域の県古文書館と図書館に所蔵されている古文書や図版、地籍図などの図面を調査して、町家に関する文献史料と図像史料の情報収集に努めた。

これら3つの方向から、「クリュニー型中世町家群」を主とする対象として、中世フランスの都市家屋と構造、機能、歴史的変遷と地理的分布を解明することを目指した。

4) 加えて、この研究では、フランスにおける最新の研究状況の把握と人的コネクションの確保が不可欠である。このため、研究期間中、常にフランス人研究協力者との連携を図ることに留意した。

具体的には、これまでも常時連絡を取り合ってきたナンシー大学中世考古学研究センターを拠点として、各地の研究者からの情報収集を行うことが、各地に散在する中世都市家屋と古文書の調査を効率的に行うために有効だった。その際、ミシェル・ビュール Michel Bur 氏(ナンシー大学名誉教授であり、中世考古学研究センターの創設者)を中心とした人的ネットワークに協力を仰いだ。同時に、現在、ナンシー大学中世考古学研究センター主任研究員であり、中世建築物の考古学研究に関する第一人者であるシャルル・クレメール Charles Kraemer 氏、ナンシー大学で中世史を担当するパトリック・コルベ P. Corbet 教授とジェラルド・ジュリアート G. Giuliano 教授らと、フランスの考古学研究の状況について意見交換・討議を行うことによって、現在の中世都市家屋の研究状況に関して、できる限り最新の情報と研究成果を収集することに努めた。

ナンシー大学以外では、ディジョン大学の中世考古学担当准教授であるエルヴェ・ムイユブーシュ Hervé Mouillebouche 氏、パリの国立高等学術研究院で中世図像史料の研究を行っているペリーヌ・マヌ Perrine Mane 氏など、これまで交流を続けて来たフランスの考古学および歴史研究者との意見交換も継続して行った。

さらに、既に多くの教示を得ている、クリ

ユニー建築研究センター (Centre d'Etudes Clunisiennes、在クリユニー) を中心となって運営しているジャン＝ドニ・サルヴェク氏と、数多くの中世建築関係の画像資料が整理保管されている同研究センターから、今回も多大な協力を得た。

4. 研究成果

現在に至るまで、中世ヨーロッパの都市家屋に関して、フランスに限っても、総合的著作は存在しない。このため、上述のような研究計画に基づいて、現実には、ヨーロッパ各地の中世都市町家を現地で探索することが3年間の主たる研究作業となった。

研究第1年目(2011年度)には、西ヨーロッパ全体のなかでの中世都市家屋の位置づけを確かなものとし、フランス中南部に残された都市家屋との比較に資するために、現地調査としては、まず、イングランドの中世都市家屋の現地調査を行った。その結果、ウェールズ、イングランドには、中世町家が多く残されていることを改めて確認した。

なかでも、リンカン Lincoln に残る12世紀のロマネスク様式の石造家屋2軒は、おそらくイングランド最古の都市家屋であるように判断された。これに対して、ヨーク York の市街の Shambles 通りには、いわゆる half-timber 様式の都市家屋が密集しており、そのなかの3軒ほどには中世風の店台が残されていた。これも稀な事例である。チェスター Chester とサンドウィッチ Sandwich 市街でも、ハーフ・ティンバー様式の中世都市家屋をとくに数多く観察することが出来た。

これらの中世都市家屋は、都市城壁と城との関係で都市内に配置されることが多い。このため、コンウィ Conwy、ヨーク、カンタベリー Canterbury、ロチェスター Rochester など、都市全体の空間配置に留意して、現地調査を行った。

同時に、行程途中で見学できた11~15世紀の中世城砦についても、フランスなど大陸よりも初期の残存例が多く、天守塔を中心とした城の発達過程を具体的に把握することが出来た。

研究第2年目(2012年度)には、前年度同様、先行研究と現地情報の収集に努めると同時に、フランス文化省編集の歴史的建造物関連のデータ・ベース(メリメ)を活用することにより、各都市の中世家屋の個別情報を網羅的に調査・把握したうえで、サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路の通るフランス南西部とラングドック地方、プロヴァンス地方西部の現地調査を行うことを中心的作業とした。その結果、当該地域に現存する中世町家について、相当程度把握することが出来たと考えている。

現地調査としては、まず、ナンシー大学中世考古学研究所を訪問して、ミシェル・ピュール名誉教授らに、最近のフランス中世考古学界の状況についてインタビューを行った。

その後、サンティアゴ巡礼路が展開する、前述の諸地方に残存する中世都市家屋を調査した。

このなかでは、カオール Cahors とサン・アントナン・ノーブル・ヴァル Saint-Antonin-Noble-Val に13世紀頃の比較的早い時期の都市家屋が残されていたが、これらの都市を含めて、全体としては、14世紀以降のゴシック式の町家が大部分を占めた。ここでは、フィジャック Figeac、サン・アントナン・ノーブル・ヴァル、ケイリュス Caylus、コルド Cordes-sur-Ciel を中心として、現在でも尖頭アーチの開口部を持つ中世の店舗兼住宅建物が軒を連ねている街路が幾つも現存していることを確認した。

歴史的建造物関連のデータ・ベース(メリメ)も、これらの建物すべてを網羅するものではなく、個々の町家の建設・改築の年代に関して、正確なデータを得ることが困難な場合が多いのが現実である。調査と記録の方法としては、写真とビデオを用いたが、今後は、建築学的図面を取ることも視野に入れて調査を進める必要があることを痛感した。

さらに、フランス南西部に点在するバステイド bastides と呼ばれる防備小都市として、ドム Domme、モンパジエ Monpazier、モンフランカン Monfrancin など観察することも出来た。広場に面してアーケードを備えた建物の多くは14~15世紀に遡るものであり、広場と道路との配置の関係も含めて、ほかの中世都市にはない農村的な小都市の特徴を知ることが出来た。

研究第3年目(2013年度)には、再びフランス中南部各地の都市を訪れて、中世都市家屋の現状について調査した。そして、このための日本での予備調査と現地調査後のデータと史料の分析が本年度の主たる作業となった。現地調査では、昨年度に調べたサン・アントナン・ノーブル・ヴァルとコルドを再訪して、中世家屋の現状をビデオに収めたほか、昨年度まで未調査だったコロンジユ・ラ・ルージュ Collonges-la-Rouge、マルテル Martel、ボーリユー・シュル・ドルドニー Beaulieu-sur-Dordogne、リル・シュル・タルン lisle-sur-Tarn、カペスタン Capestang、ウゼス Uzès などの都市で、新しく中世町家の現存状況とその形態的な類似を確認した。

また、カルカッソンヌ Carcassonne 北方のカバルデス Cabardès 地方に残る中世城砦群(les châteaux de Lastours)とその周辺の中世農村遺跡の様子を調査出来たことは、incastellamento(城砦集落形成)を実例に即して理解するうえで非常に有益だった。同時に、プロヴァンス地方に残るローマ時代の道路と橋の様子を見ることも出来たが、これは、古代から中世への建築技術の継承の問題を考えるうえで、重要な参考材料となった。

さらに、2014年3月には、ノルマンディ

一地方を調査する機会があったが、その際には、特に同地方の首邑ルーアン Rouen において、木造骨組み(ハーフ・ティンバー)の都市建物を多数見学することが出来、仏中南部の石造中世都市家屋とは異なる北フランスの中世町家の形状の特徴を実地調査によって非常によく理解することが出来た。

ルーアンの場合、1階部分の多くは石造だが、2階以上は木造であるため、石造アーチは用いられず、1階開口部の上辺を支える木製の梁も含めて、水平の木材が開口部の上辺を支えることになる。これに対して、最上階まで石造であるフランス中南部の中世町家では、1階開口部を木製の梁で支えることは不可能であり、ロマネスク式やゴシック式の石造アーチが1階開口部を支えることになる。この点が、両者の構造上の対比の本質を作り出しているように思われた。

3年間の調査と研究の結果、これまでの仮説に修整・追加すべき点として、以下の3点を確認した。

1)クリュニーの中世町家の特徴とされる2階の装飾窓(claire-voie)が、教会西正面中段を飾る連続アーチ装飾を模したものであるという、ピエール・ギャリグー・グランシャンとジャン＝ドニ・サルヴェクの説に関して、クリュニーとそれ以外の諸都市でこれらの装飾窓を詳細に観察すると、ロマネスク式の2連窓が連続するものであることが明らかである。その点で、これは教会西正面中段を飾る連続アーチ装飾とは異なり、むしろロマネスク期の世俗建築にしばしば見られるロマネスク式2連窓の応用形とみなすべきである。

2)同じクリュニーの中世町家の1階部分のゴシック式尖頭アーチからなる開口部については、このような開口部を持つ町家の分布とサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路との相関性を否定することは今のところ出来ない。しかし、今回の3年間の調査・研究だけでは、いまだ未調査の地域が多く残されており、今後の研究の結果を待たねばならない。

しかし、サンティアゴ巡礼路沿いの中小都市の大型公共建築物の1階部分には、この尖頭アーチが複数、連続して用いられていることがしばしば観察される(コルド、マルテル)。さらに、このような傾向は、サンティアゴ巡礼路をはるかに越えて、中世ヨーロッパ最大の世俗建築とされる、フランドル都市イーブル Ypres, Ieper の毛織物取引市場 La halle aux draps (第一次世界大戦時に破壊。その後、再建された。)や、ヴェネツィア Venezia やマントヴァ Mantova のパラッツォ・デュカーレ Palazzo Ducale に至るまで広く認められる。

これら大型公共建築物に用いられた尖頭アーチ列と、小型町家に用いられた単一アーチの開口部を区別しつつ、双方を合わせて論

じることが出来るような仮説を構築する必要がある。

3)これに対して、フランス北部やイングランドで一般的なハーフ・ティンバー様式の町家に関しては、前述のルーアンにおける観察結果におけるように、2階以上が、石造ではなく木造であることから、水平の木製梁と戸口からなるその1階開口部の鉤形(逆L字形)の形状が生み出されているように考えられる。

このことから、中世以降、近世まで残されていたパリのハーフ・ティンバー様式の町家と、イタリアのオスティアなどに残る古代ローマ都市の多機能的共同住宅 insula の1階開口部の鉤形の形状の類似から、両者の連続性を主張する後藤久『西洋住居史』(彰国社、2005年)の仮説を見直す必要があると考えられる。

古代ローマ建築と中世町家との接点は、ハーフ・ティンバー様式の木造町家ではなく、ロマネスク式やゴシック式の石造アーチの1階開口部を持つフランス中南部の町家にこそ見出されるべきであるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

(書評・堀越 宏一)「佐藤猛著『百年戦争期フランス国制史研究』、『歴史学研究』916号、2014年3月、57-59、62頁。

堀越 宏一「タピスリーを愛した人びと 中世フランス貴族の衣食住」『芸術新潮』2013年5月号、62-91頁。

(新刊紹介・堀越 宏一)「Fabienne RAVOIRE et Anne DIETRICH (éd.), *La cuisine et la table dans la France de la fin du Moyen Âge: contenus et contenant du XIV^e au XVI^e siècle*, Caen, Publications du CRAHM, 2009, 455p.」『西洋中世研究』第4号、2012年12月、225-226頁。

(書評・堀越 宏一)「城戸毅著『百年戦争 - 中世末期の英仏関係』、『史学雑誌』第121編第10号、2012年10月、100-108頁。

堀越 宏一「騎士と武士の比較史」『歴史と地理(世界史の研究)』No.656、2012年8月、56-59頁。

堀越 宏一「弓馬の道」と身分 —中世ユーラシア大陸武器事情—』『星座』No.61、2012年4月、22-24頁。

[学会発表](計3件)

堀越 宏一「佐藤猛著『百年戦争期フランス国制史研究』」合評会における報告、青山学院大学青山キャンパス、2013年6月1日。

堀越 宏一「ヨーロッパにおける歴史観から見た「断絶」と「新生」、慶應義塾大学言語文化研究所公募研究「断絶」と「新生」キリスト教世界とイスラーム世界におけ

るその多様なあられ」公開シンポジウム
「断絶を超えて 前近代のキリスト教世界
とイスラーム世界における多様な試み」に
おける報告、慶応義塾大学三田キャンパス、
2012年12月1日。

堀越 宏一「中世ヨーロッパにおける石造
の城の誕生と展開」、REN研究会における報
告、青山学院大学青山キャンパス、2012年1
月21日。

〔図書〕(計2件)

堀越 宏一・甚野 尚志編『15のテーマで学
ぶ中世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房、2013
年1月。「序章〔共著〕」(1-11頁)「戦争の
技術と社会」(83-104頁)「都市と農村の住
居」(254-272頁)。

堀越 宏一「中世ヨーロッパの写本挿絵に
おける時代表現と写実性」甚野尚志・益田朋
幸編『ヨーロッパ中世の時間意識』知泉書館、
2012年5月、337~358頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀越 宏一 (HORIKOSHI, Koichi)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：20255194

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：